九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『月に吠える』刊行前後 : 萩原朔太郎年譜考（三）

國生, 雅子
九州大学大学院博士課程

https://doi.org/10.15017/10453

出版情報：文獻探究. 17, pp.14-22, 1986-03-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『月に吠える』刊行前後
―萩原朔太郎年譜考(三)―

國生雅子

大正六年二月十五日――日本近代詩史上に永遠に記録されるべき『月に吠える』の発行日である。[注1] その前後約四年間をめぐって、例の如くいささかの年譜考証を試みたい。対象とするのは、言うまでもなく伊藤信吉・佐藤房儀両氏編筑摩書房版全集第十五巻（昭53・4）附載年譜（以下「全集年譜」と略す）。この労作の瑣細な瑕をあげつらうようであるが、今後長く研究の基礎文献として用いられるはずのものであるだけに、等閑視するわけにはいかない。より精度の高い年譜作成のための一助ともなればと筆を執った次第である。尚、全集年譜は萩原栄次宛書簡集『若き日の萩原朔太郎』（萩原隆著 筑摩書房昭54・6）刊行以前の編纂であるから、それによって明らかとなった新事実は盛り込まれてはいない。しかしながら今回取り上げる時期に、栄次宛書簡はほとんど関わらないことを申し添えておく。

さて、まず最初に、大正四年から八年にかけての生活の、簡略なスケッチを示しておく。大正四年六月四日付の白秋宛書簡によって沈黙を宣言した彼は、約一年間の作品発表中断期を迎え、それが破られるきっかけとなったのが、大正五年四月十九日朝の神の声を聞くという事件であった。以後旺盛な活動期に入り、詩誌「感情」の創刊（大5・6）、そして処女詩集『月に吠える』の刊行に至る。この間体調はおもわしくなく、大正五年十二月には鎌倉に療養、帰省や上京をはさみつつ、療養生活は翌年二月に及んだ。再び故郷に逼塞した彼は『青猫』前期作品群を書き継ぐが、大正七年四月を最後として、またもや作品発表が絶える。つまり本稿で取り上げる時代は、大正五～六年の活動期を中心として、その前後に沈黙の季節が控えているわけである。そうして大正八年五月一日、後に悲惨な結末を迎える上田稲子との華燭の典があげられた。

(一) 詩人と音楽

大正四、五年の沈黙期、朔太郎が音楽活動に熱中していたことは、伊藤信吉氏の研究によって早くから知られている。従って、全集年譜の音楽関係の記事は、伊藤氏『萩原朔太郎―浪漫的に―』（北洋社 昭51・7）中の「音楽の中の詩人」に紹介されたものが大半で、それぞれ書簡や新聞記事によって事実と確認される。今のところ伊藤氏の調査に付け加えるべきめぼしい資料は持ち合わせていないが、次の二点を指摘しておきたい。

○「ゴンドラ洋楽会」の成立は大正四年秋と推定されている。大正五年一月八日に第一回演奏会が開催されている事実から、そのように判断されているわけだが、これはほぼ確定と言っても差し支えない。いや、九月頃と、時期を限定することも可能である。「萩原朔太郎研究会報」27号（昭51・10）に木下謙吉氏は「俳優とキツネの巣の周辺」を書き、次のような大正四年十月一日付奈良宇太次書簡の一部を紹介している。

出稿久しぶりで萩兄とのむ、氏はマンドリンに御熱心、今回ゴンドラ洋楽会なるものを組織した、兄にも会ひたがっている。

木下謙吉（謙二）、奈良宇太次はいずれも前橋の朔太郎を取りまいていた文学青年で、「侏儒」の同人。もちろん、厳密にはこの奈良書簡を確認しなければ断定はできないわけだが、単なる回想ではなく、当時の生の資料の紹介であるだけに信頼度が高いと言えよう。その「ゴンドラ洋楽会」の第三回試演会が大正五年六月十六日に催されたことになっているが、これは六月十七日の誤りである。伊藤氏は前出『萩原朔太郎―浪漫的に―』中に、「マンドリンとギター」誌大正五年七月号の「萩原朔太郎氏を中心とする同倶楽部は六月十七日夜第三回試演会を開いた」という記事を紹介している。同じ資料は新潮社版全集第五巻（昭35・12）所載の伊藤氏編年譜（以下「伊藤年譜」と略す）の大正四年の項に注解として引かれているが、肝心の大正五年の項では十六日になっており、この単純なミスが全集年譜にまで引き継がれたものと思われる。前橋市立図書館に収蔵されているはずの「マンドリンとギター」誌は未見であるが、前橋市立図書館編「萩原朔太郎書誌」（昭39・6）にも六月十七日と明記してあるし、伊藤著書が「本の手帳」誌連載中に、氏は二度までもこの資料を引いているのであるから（「音楽の中の詩人」二、三昭38・6、7）、間違いないものと思われる。

(二) 上京について

朔太郎の詩壇的活動が活発化すれば、当然上京の機会も増えることになろう。事実、大正五、六年、朔太郎は少なくとも五度ほど上京している。まず最初は大正五年五月。全集年譜には、「上京。室生犀星と『感情』発刊について相談（推定）」とある。このままでは上京自体が推定であるかのように誤解されかねないが、「詩歌」大正五年六月号「消息」に「萩原朔太郎君は前月上京した」と報じられていることから、確かな事実と認め得る。「……相談したと思われる」とでもしておく方が親切というものではなかろうか。それはさておき、この時の上京はより精密にその時期を限定し得るのである。

萩原が来たので、ちよつとした会を鴻の巣でやるために、昨日相談に行つたのでしたが、あいにく留守でした。明八日午后六時鴻の巣。かるい晩餐。費壱円五十ほど。ほんの二三人よるんですから、出てくださるようにたのみます。けふはいちんち引籠り居りました。七日晩

以上は木俣修氏によって紹介された犀星の白秋宛書簡である。[注(2)] 日付は大正五年五月七日。全集十三巻収録の書簡番号一五〇高橋元吉宛書簡は五月六日付で、直接手渡されたものだが、内容より大正五年とされている。この推定は妥当なものとして納得され、とすれば朔太郎は六日、元吉に手紙をしたためた後に出郷したということになりはしないだろうか。前橋・上野間約三時間半。朔太郎到着し犀星白秋宅訪問と、犀星書簡からは読み取れる。では、帰郷はいつ頃なのだろう。五月十六日には前橋より東京の竹村俊郎にあてて手紙が出されている。しかもそれは竹村よりの来信に対する返書であるから、九日から、遅くとも十二、三日迄の間には帰り着いていたはずと考えられよう。木俣氏も朔太郎の上京を「感情」創刊の相談のためと見ているが、「偶然に萩原と私との間にうすくても永く続く雑誌がほしてを話が出た。尚慌しい電車の中や喫茶店などでもくろみ

をやってゐる中に、もう此の（感情）が生れた。／そして萩原は前橋へかへつた」と、屋星が創刊号「編輯の後に」に書いているように、雑誌発刊の打ち合わせは東京で行われたわけであるから、この折の上京目的を他に探すことは不可能というものではなかろうが[注13]、

さて次には、その事実が認められないのに上京と記した誤りが見られる。大正五年十月頃「詩集出版計画本格化す」――煩雑になるのでいちいち資料はあげないが、これは確かなことである。その後に注記を意味する「＊」印を付して、「書名に『月に吠える』を考える。上京して恩地孝四郎と装幀、挿絵のことなどを相談。同時に前田夕暮を訪問」とあるのだが、実は朔太郎は上京していない。いや、したくともできなかったのだ。何故ならば、全集年譜に記された如く、十月十四日「この日から十一月中旬まで病臥」していたのだから。病臥の事実は「去る十四日頃から病気になつてまだよくならないで困つて居ます」といった多田不二宛書簡（大5・10・30）をはじめとして、竹村宛書簡（大5・10・30）栄次宛書簡（大5・12・30）、あるいは「感情」大正五年十一月号「消息」から確認され、同年十一月中旬と推定された高橋元吉宛書簡[注14]（「小生、病気殆んど全快したるも、尚病後憔悴のため、保養かたがた、二、三日中にどこか気候のよい所へ旅行に出かけやうと思ひます」）によって、後の鎌倉療養が予告されるわけである。このような事実関係を背後に置いて、次の恩地孝四郎宛書簡は大正五年十月中旬と推定されたのではないのだろうか。

実は小生、去る十四日に上京する筈だつたので、その時是非大兄に御面会していろいろな御話を伺ひたいと思つて居たのでしたが折悪しく病気にかゝり今日尚臥床してゐるやうなことで実に残念に存じます。（中略・詩集の題、挿絵等の事が伝えられる）

以上のことはすべて御面会の節に座談で申し上げるつもりでした。併し病気がまだしばらく直りさうにもない。それで多分上京は十一月中旬になりませう。あまり遅れると心配なのでとにかく予紙で大体申しあげることにしました。

もう説明は不要だろう。上京できなかった朔太郎は、予紙で装幀その他のことを恩地と相談したのである。

朔太郎は実によく風邪をひく男なのだが、この折の病臥も「九月下旬からひいた風邪」（大5・12・30栄次宛書簡）をこじらせたためであった。

そうして前述した如く、鎌倉長谷へ療養におもむく。十二月の「中旬、一週間ほど帰省」と全集年譜は伝えるが、十二月二十六日付大手拓次宛書簡より、期間は「十二日から二十日まで」と判明している。また、「感情」大正六年一月号「編輯記事」上で、屋星は「萩原は十二月いつぱい鎌倉にゐるが正月は家へ帰つて上京する」と予告したのだが、この折の帰省計画が実現しなかったことは、大正六年の賀状がすべて鎌倉発であるという事実から明らかであろう。しかし東京へはやって来た。大正六年一月十四日と同二十四日の上京は、朔太郎自身「感情」二月号「編輯記事」に記しているのだから、疑いようもない。その他、二月末鎌倉より帰郷の際の上京、九月二十九日見合いのための上京、いずれも問題はないので触れる必要はなかろう。実は伊藤年譜には、大正六年中今一度の上京が記録されていたのである。十一月二十一日、詩話会第一回集会に参加との記事がそれで、もちろんそのような事実は認められず、全集年譜では訂正されている。だがこの詩話会に関して、多少述べておきたいことがあるのだ。

(三) 詩話会成立余話

大正期最大の詩人組織であった詩話会については、朔太郎が最後までそこに止まり、末期の「日本詩人」の編集を佐藤惣之助と共に担当したことなど、よく知られている。党派を越えた詩人の談合の会として出発したこの組織の、第一回会合が大正六年十一月二十一日であったことも、現在周知の事実とされていると言って良かろう。その提唱者である川路柳虹「詩話会成立のころ」（「日本詩人」大15・11）「詩話会のこと」（『日本現代詩大系』6 河出書房昭26・10「月報」9）、また福田正夫「詩話会―大正詩の隆盛期回顧―」（『日本文学講座』9 改造社昭9・10）等、すべて大正六年十一月二十一日、万世橋駅楼上レストラン・ミカドに於てと明記してある。この日付で、全集年譜には次のように記されている。

11月21日　万世橋「レストラン・ミカド」の会合で綜合的詩人団体「詩話会」設立され、会員となる。

※この折、毎月二十一日ミカドでの集会と年刊アンソロジー刊行を決める。朔太郎は第三回あたりから出席。

同日付の白鳥省吾宛書簡が前橋より発信されている事実から見て、伊藤年譜の誤りは明らかなものと言えよう。さらに、十二月二十一日には前橋の朔太郎にあてて、日夏耿之介より「詩談会は本日開きます」と記した書簡（注(5)）が書かれており、第二回詩話会が計画通り開かれ、そして朔太郎が出席しなかったであろうことが判明するわけである。一方、大正七年二月上旬と推定される高橋元吉宛書簡には、「東京から帰って以来、ある仕事に没頭してゐるので心ならずも失礼してゐます、実は目下『自由詩論』の著作にふけってゐるのです」云々と見え、大正七年一～二月に上京したことがうかがえる。一月二十一日の詩話会に出席し、そこで刺激を受けて「自由詩論」の執筆に着手したという推測は充分にうなづけるものであろう。別に定まった会員組織を取っていたわけでもなさそうなので、不参加なのに会員となったと言えるかどうかは大いに疑問だが、ともかくも詩話会第一回大会の記事は、朔太郎に関する限り一応了解される。実は私が釈然としないのは、十一月二十一日に、毎月の集会と年刊アンソロジーの刊行が決められたという部分なのである。「感情」大正六年十一月号「消息」に、次のような無署名の記事が掲載された。少々長くなるが全文引いておく。

●十月二十一日の夜に万世橋駅楼上のみかどで「詩人」「伴奏」「感情」発起の詩談会が開かれた。室生君が喪中で行かれなかつたから私が出席した。私は種んな用事に取りまぎれて遅く出かけたが、私の行つた時は既に諸氏の集つて盛に議論の花を咲かせてゐる時であつた。福士氏の民衆芸術と神秘主義に関するErklärungは暫く諸氏の攻撃の的になつてゐた。「ま、まつてください……」と何度か繰り返しながら手を振る様子が全然私の想像してゐた福士氏と飛び離れてゐた。

やがて山宮氏と川路氏の発議で詩壇の人人の会合を毎月やろうといふ相談があつた。目的は勿論、詩人相互間に於ける主義主張上の誤解を除き、且つ詩壇そのものの社会的地位を向上するためである。又同時に次の相談もあつた、それは年に二回位パンフレツトを発行し、各自所要の頁数に対する費用を負担し、遍く詩壇の人人の作を載せる、といふことである。両方とも誰にも異存なく相談は纏つた。愈愈、詩話会といふ名で来月から毎月二十一日夕刻よりみかどで開く事にした。会費は六十銭で幹事は二名づつ

交代（十一月の会には川路氏と私）と定つた。尚詳細は川路氏から発表になる筈であるが、詩壇に関係ある方方の多く出席されることを望んでゐる。今度の会合に集つたのは、茅野蕭々氏、尺野庄平氏、向井夷希微氏、日夏耿之介氏、山宮允氏、福士幸次郎氏、斎藤勇氏、川路柳虹氏私の九人であつた。散会したのは十一時で久しく見られなかつた月が鏡のやうに美しく下界を照してゐた。

念のために記しておくが、「感情」十一月号は十一月十五日印刷、同十七日発行であつて、冒頭の日付は十一月二十一日の誤りではあり得ない。「年二回位」発行の「パンフレット」は、その内容から見て「アンソロジー」と呼び得るであろう。とすれば全集年譜に注記された詩話会第一回会合の決定事項は、実はその一ヶ月前に取り決められていたということになる。問題はさらに一つ。いったい誰がこの「消息」を書いたのだろうか。「感情」同人のうち、竹村俊郎は入隊中（十二月除隊）であり、可能性のあるのは多田不二か朔太郎。しかし幹事となったこの人物は、当然十一月の会に出席したはずで、とすれば多田以外には考えられない。それにしても、詩話会第一回会合における幹事多田不二は、その時もやはり尺野の代理だったのだろうか。実は川路柳虹が次のような文章を書き残しているのである。

神秘主義ということで論争があったのもその頃で、福士幸次郎君が一方の論将だった。それも一つ話してはという段取りになって第一回の会合には福士君にも切に出席するやう望んだ。

第一回の会合者は八人ばかしだったと覚ふ。今記憶にあるのは山宮允、茅野蕭々、福士幸次郎、尺野庄平、日夏耿之介それに私と、多田不二君が室生君の代理ということで（まだ大学の正服をきてゐたと思ふ）来、そのほか向井夷希微氏といふその頃一詩集を出された可成り年輩の人が一座したと思ふ。席上神秘主義の論で大に花が咲いたことを憶へてゐる。

「詩話会成立のころ」

川路は自己の記憶のみを頼りとしてこの文章を書いたわけで、後の「詩話会のこと」では多少出席者に異同が見られるが、多田の場合そこでも尺尾代理と注記してある。もちろん他の出席者は、十月も十一月もそう大差はなかったと思われるので深くは問わないが、福士幸次郎を中心とする神秘主義論争は、多田の伝える十月の会合の模様と重なるのではあるまいか。「席上福士幸次郎対茅野、日夏氏らの論戦は福士君の超理論主義への挑戦となり中々愉快であった」と、「詩話会のこと」にも記されている。つまり、川路は十月の会合と十一月のそれとの記憶を混同し、あまつさえ十月に設立準備会とでも言うべき集りを開催したことを、きれいさっぱり忘れはてしまったのではなかろうかと考えられるのである。詩話会としての正式発足は確かに従来通り十一月二十一日でよいのだが、一ヶ月前の会合のことも、文学史の片隅に記録されてしかるべきであろう。日夏耿之介『明治大正詩史』（巻ノ下新潮社昭4・11）にもまったく触れられてはいないし、乙骨明夫氏は「『詩話会』についての考察」（「白百合女子大学研究紀要」6昭45・12）と題された論稿において、『感情』の資料を引きながらも、この問題については不問のままに終っている。ともかくも成立当時の川路、あるいは山宮允の文章、雑誌、新聞の消息記事等々、まだまだ調査すべき資料は残されている。朔太郎年譜考証という目論見からは多少外れるが、精査の上次の機会に報告することを約して、詩話会成立についての考察は打ち切ることとしよう。

(四)『月に吠える』以後の出版計画

朔太郎は自らが詩人であることに深くこだわり続けた。しかし詩を製作発表していた期間はさほど長いものではない。本稿で取りあげた時代でも、その約半分は詩人として開店休業の状態であった。そうして詩集の何倍もの、詩論、アフォリスム、エッセイといった散文集を世に出している。ここに、恐らくは朔太郎という詩人の特異な地位が象徴されていると考えられるが、『月に吠える』刊行後早くも散文集の出版を計画しているのである。

前節で既に「自由詩論」の名が出ていた。元吉寂書閣には「是非二月中にやつて三月中に出版したい」と語られていたが、とうとう実現しないままに終った。この書物に関して、全集年譜は大正七年二月「上旬ごろから『自由詩論』(『詩の原理』の素稿と推定)の執筆にかかり、翌年三月ごろまで専念」と伝えている。

『詩の原理』の素稿というのは確かに言えるだろう。同書「序」には「感情」に「本書の近刊予告が出てゐた」と記されているが、そのようなものは発見されず、恐らくこの時朔太郎の念頭にあったのは「自由詩論」のことと思われる。大正七年十一月三日付前田夕暮宛書簡に「啓蒙哲学詩の原理」の名が見えるので、このころ改題されたのであろう。「感情」大正七年六月号「『自由詩論』は約四百頁もあるもので、それがまとまれば大変よいものになると思ふ。四五年来の感想も収録するが主として新うしく書き足したものが多い」(扉裏「雑記」)、同十月号「萩原の四百枚にあまる感想集は『自由詩論』と題した。萩原の苦しい信仰や詩についての感想があつまつてゐる。出版の時期未定」(「編輯記事」)といった雑報類によると、それは純粋の詩論というよりも感想随筆集といった性格をあわせ持っていたように思われる。全集年譜の主張する如く、八年三月頃まで朔太郎が執筆に専念していたとの確証は摑み得なかったが、感想随筆集ならば大正六年時より計画されていたのである。その辺の記述、全集年譜はいささか妥当性を欠いていると思われる。

まず、「感情」大正六年六月号「編輯後記」に、扉裏は「萩原も今年の九月に『感想文集』を出す」と書いており、同号四頁の余白記事によってその題が『青く光る』と予定されていたことが判明する。これが『虹を追ふひと』と改題されたらしいことは、同じく「感情」七月号「編輯後記」によって知られ、同号と九月号(八月号は休刊)の裏表紙には広告が掲載されている。この出版計画はかなり本決まりになっていたらしく、「詩歌」八月号「消息」にもその旨記されていた。ただしこちらは『夢を追ふ人』と誤記されているのだが。しかし予定された九月になっても本は出なかった。遅刊は珍しいことではない。翌大正七年一月には「春までには」(「感情」「編集記事」)と引きのばされている。それが『青猫』と改題され、四月頃刊と予告されるのが「感情」二月号。四月、五月号にそれぞれ『青猫』執筆中の模様が伝えられ、先程の『自由詩論』関係記事へとつながるわけである。全集年譜、大正六年六月号「新潮」の記事の後に「この頃、感想文集『青く光る』を企画したが実現せず」の記述は、九月刊行予定を明記すべきだが、まあ妥当なものとみなしてよかろう。しかし同年十一月「同月頃 感想文集『虹を追ふ人』を企画したが実現せず」、大正七年「4月頃 散文集『青猫』の出版を企画したが実現せず」の二項は明らかな誤りと言えよう。

『月に吠える』以後の出版計画を、次のように推測する。

まず、大正六年九月をメドに散文集の出版を考えた。大正三～四年期の所謂「詩的散文」類や「虹を追ふ人」(「感情」創刊号)、あるいは「調子本位の詩からリズム本位の詩へ」(「詩歌」大6・

5）といった詩論等、書きためた原稿も相当数ある。この時構想の中心にあったのは「詩的散文」ではなかったろうか。『青く光る』という題名は「光とは詩である」（「光の説」「異端」大タ・2）と熱っぽく語っていた頃の彼を思い出させるものがある。だが、「疾走」に犯され、奇態な光に憑かれ、詩を「実感から発した『肉体の現状』に関する報告」（「言はなければならない事」「詩歌」大タ・5）とみなしていた時代とは、大きく隔たった立場に当時の彼は立っていたと考えられる。この変化の契機は大正五年四月の、例の神の声を聞くという事件にあるのだが、それについては別の場所で述べたし[注6]、またいずれ再考する予定でもある。ともかくも、大正三～四年期の作品を切り捨てた場合、単行本としては余りに薄すぎよう。そこで題を沈黙後の所産である『虹を追ふひと』と同タイトルに変更した上で、新たな原稿を書き下ろそうとした。それが遅刊の一つの原因になったのではあるまいか。この作業が進行中に、恐らくは詩話会への参加によって詩論に対する興味が刺激され、「自由詩論」に手を染めた。そしてついにはこの論文が感想随筆集として考えていた『虹を追ふひと』改め『青猫』の構想を乗っ取るようなかたちで、詩論中心の『自由詩論』として企画された。――つまり扉星の伝える約四百枚の中身を、私は『青く光る』↓『虹を追ふひと』↓『青猫』プラス大正七年二月から執筆の「自由詩論」と見るのだが、いかがなものだろう。

(五)　来訪者たち

故郷に引き込もったまま、詩ではなく詩の論理に熱中する朔太郎を、東京より訪れる人々も多かった。上州は温泉のメッカである。保養に出かけたついでに前橋へ立ち寄ったり、また逆に朔太郎が近くの温泉場まで出向くケースも見られた。大正六年五月、谷崎潤一郎との伊香保での邂逅は後者の例である。

さて、『鑑賞日本現代文学⑫萩原朔太郎』（角川書店昭56・3）収載久保忠夫氏編年譜は、大正八年六月二日若山牧水の来訪を伝えている。その根拠は、久保氏「朔太郎と音楽ほか」（「東北学院大学論集一一般教育一」76昭58・10）によって、牧水の紀行文「山上湖へ」であると教えられた。『若山牧水全集』第五巻（雄鶏社昭33・8）「解説」によれば、『自然と人生叢書』九巻として刊行された『比叡と熊野』（春陽堂大8・9）の最後に収められたこの小品は、五月二十一日から六月四日までの上州への小旅行を題材としている。赤城、榛名山へ登るつもりで前橋までたどり着いたが風邪をひきこみ、目的をはたせぬ無聊の中で、六月二日朔太郎を訪ねたわけである。前橋での宿は、大正三年二～三月、扉星も滞在したあの一明館であった。雄鶏社版全集に収められた大正八年の牧水書簡中、六月三日に妻喜志子にあてて榛名山上湖畔寺から、また翌四日にも二通、旅行中の葉書が出されており、間違いなく大正八年のことと認め得る。これが全集年譜では大正八年七月二日となっているのだ。もちろん単純なミスではあるが、害が他にも及んでいるから困る。室生扉星『第二愛の詩集』出版に伴う「愛の詩集の会」は、扉星自身が「感情」大正八年七月号「六号」に書いたように六月十日である。牧水来訪の記事に続けて「同月10日」としたために、これまで一ヶ月ズレてしまったわけである。

全集年譜が書きもらした来訪者を一人あげておこう。「多田は伊香保へ行って、前橋で萩原と楽しい会合をして来た」と、『感情』大正七年五月号「編集記事」に扉星は記している。その翌号、多田自身が記すところによると、四月の半月余りもあちこちを泊り歩いた旅だったらしく、前橋には三日滞在したとのことである。「是非

またお出で下さるやうに」といった妹達の言葉を伝える大正七年四月十五日付多田宛書簡は、この来訪の後に出されたものと判明しよう。

ところで、多田に関して以前から気になっていることが一つあるのだ。来橋に関わることなので、紙数に余裕のある今述べておきたい。

大正三年、本誌七号（昭55・12）「『詩の青春』―朔太郎と犀星の交流」で取りあげた時代のことである。七月中旬に、「多田不二、金沢から茨城への帰省の途次、前橋に朔太郎を訪ねる」と記されているが、この記事の根拠がいまだに摑めずにいる。管見に入り得た多田のエッセイのうちで朔太郎との出会いに触れたものは、①「萩原氏と室生氏」（「秀才文壇」大7・6）②「朔太郎氏の印象二三」（「日本詩人」大13・8）③「萩原さんの思ひ出から」（「文芸世紀」昭17・7）④「『感情』前後の萩原さん」（「東国」昭22・5）の四種。いずれも大正四年五月の朔太郎金沢来訪に触れ、当時四高生であった多田は犀星と共に駅に出迎えたということである。これらのうち、最後の④「『感情』前後の萩原さん」の場合のみ、金沢で会う前に大正三年頃故郷に帰る途すがら前橋の朔太郎を訪ねたとされている。「七月のうすら暑い日射しを樹陰にさけながらお宅を探して歩いたやうな気がする」と、多田の記憶は妙に生々しいのだが、朔太郎の死の直後書かれた③「萩原さんの思ひ出から」では、「休暇で帰省する途すがら度々前橋に萩原さんを訪問し詩の話をきいた」のは、金沢来訪の後とされている。後年になればなるほど若い日の記憶が鮮明に甦ることも充分にあり得るだろう。しかしながら④には、私が「詩の青春」と名付けた朔太郎の東京放浪を金沢来訪の後としたり、(二)に引いた大正五年十月三十日付書簡を「感情」創刊の前とするなど、多くの年代的錯誤が見られ、となると大正三年七月の前橋来訪も、眉唾物に思えてくる。だいたい、七月の「中旬」というのはどこから出てきたのだろうか。もちろん朔太郎は七月上旬まで東京にいたわけであるから、中旬以降しか考えられないのは確かだが、このような時期の限定は年代を経た回想文からは困難で、書簡、日記といった一次的資料か、あるいは雑誌、新聞の消息記事に拠るしかあるまい。多田来訪を裏付ける一次的資料は発見できず、かといって多田のような無名の青年の来訪を、例えば「上毛新聞」などが報道するとも思えない。全集年譜の記事は推定ではなく、確かな事実と認めた上でのことだろうが、どなたかその根拠を御存知の方は、是非とも御教示いただきたいのだが――。

了

注

(1) 全集年譜は『月に吠える』の出来上りを二月十三日と推定しているが、この日付については伊藤信吉氏『萩原朔太郎エロ漫的に』中に言及がある。二月二十一日に内務省から発表禁止の通達を受け、前田夕暮が「納本してから九日目に」出頭命令があったと「詩歌」大正六年三月号（署名M）に書いている事実から逆算したものである。しかし計算の仕方によっては、十二日と言うことになるないだろうか。

(2) 「犀星と白秋(3)―室生犀星の北原白秋に宛てた書簡およびその註―」（「学苑」昭40・6）

(3) 全集年譜大正四年五月の項に記してあるように、この月「卓上噴水」が廃刊になった後も、同誌の広告は三度「詩歌」に掲載された。さらに、「詩歌」大正四年十二月号「消息」には「ルネツサンス」と改題の上一月号を十二月十日頃発行する旨が伝えられており、連絡先は上京した犀星の下宿先になっている。恐らく犀

星には継続して雑誌刊行の意志があったと思われる。沈黙中の朔太郎が消極的なため実現に至らなかったのであろうが、「感情」の場合両者の意志がうまく噛み合ったと考えられよう。

(4) 書簡番号一六四のこの書簡を、久保忠夫氏は十一月十八日に書かれたものと見ている。「朔太郎書簡覚え書（つづき）―萩原朔太郎全集『書簡』を読む」（「東北学院大学論集―一般教育―」65昭52・9）参照。

(5)「萩原朔太郎研究会報」14号（昭53・4）

(6) 拙稿「萩原朔太郎における『信仰』と『疾患』―大正五年四月十九日の事件をめぐって―」（『原景と写像―近代日本文学論攷』原景と写像刊行会昭61・1）

引用に際しては、原則としては仮名づかいはそのまま、字体は現行のものに改めた。疑問の箇所はそのままにし、「ママ」とルビを振った。尚、傍点等はすべて原文のままである。

――九州大学大学院博士課程――